



Title	自己高揚的自己・他者評価に関する比較文化心理学的研究
Author(s)	小林, 知博
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44826
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	小 林 知 博
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 18086 号
学位授与年月日	平成 15 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科行動学専攻
学位論文名	自己高揚的自己・他者評価に関する比較文化心理学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 大坊 郁夫 (副査) 教授 日野林俊彦 教授 釘原 直樹

論文内容の要旨

第1節. 問題

「勝てたのは、応援してくださった皆さん、そしてチームのみんなのお陰です」—このような勝者の言葉は、日本では日常的に耳にする。日本人は、心の底から自らの能力を低く評価しているのだろうか。それとも、周囲からねたまれないように、わざとネガティブな自己呈示を行っているのだろうか。本研究は、自己を現実以上にポジティブ視する傾向（自己高揚）について、「自己高揚的な自己・他者評価が、日本人にはどのような形で生起するか」という問題意識に基づき、比較文化心理学的な観点から明らかにすることを目的とした。

第2節. 理論

社会心理学の主流である北米における研究では、「自己高揚バイアス」（自己評価において、自分に都合のよいように判断や情報の理解を歪めること）は非常に頑健に見られており、数多くの研究で報告されている（e.g., Brown, 1998）。その中でも有名なものにポジティブ幻想（positive illusion, Taylor & Brown, 1988）がある。ポジティブ幻想とは、①非現実的にポジティブな自己観（ポジティブな特性をネガティブな特性より、自分にあてはまるととらえられ、記憶される）、②コントロール幻想（環境や出来事に対し、現実で考えられる以上のコントロールを自分が持つと認識すること）、③非現実的楽観視（自分の将来をバラ色に描くこと）の3種類の現象で定義されている。このポジティブ幻想を持つ人ほど、精神的健康度が高いとされている（Taylor & Brown, 1988 ; 1994）。

このように、北米における自己高揚に関する研究結果は明白であるが、日本人についての研究結果は、必ずしも一貫していない。Heineらの一連の研究（Heine & Lehman, 1995, 1997, 1999）では、日本人は北米人に比べて自己を「高揚」ではなく、「卑下」する傾向が、様々な従属変数において強く見られている。そして、日本人の自己概念はネガティブなものである、と結論されている。

これまでのところ、日本人が北米人と異なる自己評価を行う現象への説明として、2種類の理論的解釈が行われている。まず両解釈とも、日本では「他者の前では謙遜的（自己卑下的）に振る舞うべきだ」、北米では「自己の有能さを積極的にアピールするべきだ」などの文化規範があることが前提となっている。そして、一方は「そのような文化規範は心的プロセスに内在化されており、日本人は常に自己批判的に自己を評価する」という解釈（集合構成理論；Kitayama, Markus, & Norasakkunkit, 1997）で、他方は「日本人も北米人も基本的に自己高揚を行うが、それが許容される状況かどうかというのは文脈の問題である」という解釈（自己呈示理論；Schlenker & Leary, 1982）で

ある。本研究では、かかる観点から上記の問題意識について解明するべく、12の研究を行った。

第3節. 研究1～4 自己・他者評価に影響を及ぼす要因の比較文化的研究

研究1～3（被験者数合計：日本人338人、北米人188人、それぞれの男女数は150人と195人、52人と136人）では、北米人と日本人を対象に調査を行い、以下の結果を得た。(1)日本人は北米人よりも、自己評価を低めに、親友評価を高めに評定することが明らかになった。この「親密他者高揚」は、他者との関係性を重視する日本人の場合、親友を拡張自己の一部だととらえた間接的自己高揚だととらえることもできる。また(2)自己を他者よりも好意的にとらえるという「自己-他者バイアス」は、北米人にも日本人にも見られた。(3)日本人は重要性の高い特性については、「自己-他者バイアス」が顕著であった。(4)日本人は学生のみならず、社会人にも自己高揚的傾向がみられた。(5)日本人、北米人ともに、高自尊心者が低自尊心者よりも自己高揚的自己評価を行っていた。

北米人も日本人も、自分にとって重要な特性であったり、拡張自己の一部である親密他者に対しては、ポジティブ視をするという結果が得られた。重要性という要因や、「自己-他者バイアス」という観点を考慮に入れると、日本人も状況により自己高揚的傾向が確認されることが明らかとなった。

第4節. 研究5、6、9 自己高揚への動機づけを上昇させた場合の自己・他者評価

研究5～6（日本人99人、北米人98名、男女それぞれ74人と75人、36人と62人、被験者数合計197人）では、日本人および北米人の被験者に偽の課題を行わせ、その後ネガティブあるいはポジティブなフィードバックを与えることにより、自尊感情回復への動機づけを操作した（自己高揚理論では、失敗して自尊感情に脅威を感じると、それを回復させるために自己高揚動機が強く働くと考えられている）。そしてその動機づけが自己・他者評価に及ぼす影響について検討した。その結果、日本人・北米人ともに(1)失敗というネガティブ・フィードバックを受けた被験者は、自集団（自分と同じネガティブなフィードバックを受けた他者）をポジティブに評価していた。この自集団バイアス（自分と同じ状況の集団をポジティブ視すること）は、間接的に自分も高揚するという間接的な自己高揚だと解釈される。また(2)日本人、北米人ともに高自尊心者が直接的自己高揚（自分の現状のポジティブ視）を行っていることが示された。その他、日本人には自尊心の効果がみられ、(3)高自尊心者に自分の将来をバラ色に描くという非現実的楽観視（間接的自己高揚）が見られたが、(4)低自尊心者では全ての従属変数について、自己卑下的傾向が見られていた。

研究9（日本人135人）は、自己高揚への動機づけとして、「自分の将来に関連のある分野かどうか」を操作し、自己奉仕的な評価基準選択（自己像と「成功する人の像」を類似させるようなバイアス）の存在を検討した。その結果、将来に関連のある分野でのみ、自己奉仕的な評価基準選択が行われており、日本人でも動機づけが高い場合に自己高揚バイアスがみられることが明らかになった。

第5節. 研究7、8 潜在的な自己・他者評価～自己呈示の影響を最小限に～

自己評価や人種・性別など、ステレオタイプにつながったりセンシティブな話題に対しては、その評価に際し評価懸念（Rosenberg, 1969）や要求特性（Orne, 1962）がかかわり、他者からどう思われるかを気にするあまり被験者の反応にゆがみが出るのが、近年の研究で指摘され始めた。研究7、8では、評価懸念の影響を受けない Implicit Association Test（Greenwald et al., 1998）を用いることによって、自己呈示の影響を最小限にした上での自己・他者評価を検討した（日本人60人、北米人113人。男女それぞれ22人と34人、56人と57人）。従来の測度と比較するために、潜在的（implicit）自己評価と、自己報告式の質問紙を用いた顕在的（explicit）自己評価を比較した。潜在的自己評価の結果は北米人も日本人も類似していたが、顕在的自己評価の結果は、先行研究と類似し北米人と日本人で相違していることが明らかになった。

具体的には、潜在的評価では、北米人でも日本人でも、親友が最もポジティブに評価され、次に自分自身、そして同じ大学の他の学生が最もネガティブに評価されていた。他方、顕在的評価では、日本人は潜在的評価より少し親友をポジティブ視していたが、北米人は自己を強くポジティブ視しており、次に親友、そして他の学生、という順番であった。詳細な分析の結果、北米人は評価の顕在性が高まるほど自己高揚を行っており、顕在・潜在的反応の間に不一致があることが明らかになった。つまり、評価懸念が高まるほど、自己高揚が強くなったと考えられる。日本人は顕在的にはより強い親密他者高揚を、潜在的には弱い親密他者高揚を行っており、評価懸念が高まるほど、親密他者高揚を行っていた。ただし日本人の顕在・潜在的反応の間の不一致は、北米人と比べると小さかった。

この結果より、日本・北米ともに、潜在的にはポジティブな自己および親友評価を行っているが、日常的にはそれ

ぞれの文化規範に合わせて、北米では強い自己高揚傾向が、日本では自己卑下の傾向が表出されるのではないかと解釈できる。

第6節. 研究10~12 ポジティブな自己・他者評価および自己呈示が社会的適応に与える影響

研究10-12(被験者401人、被験者の友人235人、被験者の親142人。被験者および友人の男女の人数はそれぞれ、125人と273人、63人と178人)では、第7章までで明らかになった、日本人の自己評価や親密他者評価が、社会的適応にいかなる影響を及ぼすかについて検討した。社会的適応の尺度として、研究10ではGHQ-28(精神健康調査票、中川・大坊、1996)を、研究11ではGHQ-28と主観的幸福感を(角野、1993、遠藤、1997)、研究12ではGHQ-28と関係性評価(遠藤、1997)を用いた。また被験者以外に、被験者が選んだ親密な他者2名(親友と親)にも実際に回答してもらい、他者からの評価と、被験者の社会的適応の関連も検討した。その結果、精神的健康には、被験者の自己評価よりも、親への自己高揚的自己呈示や、友人への自己卑下の自己呈示が関連していることが明らかになった。またそのような自己呈示や他者からの実際の評価のポジティブ性が、親子関係や友人関係の良好性と関連していた。そのような関係性のポジティブ視は、また被験者の主観的幸福感とも関連していた。

他者とのつながりを重視する文化規範を持つ日本では、被験者・友人・親はお互いに好意的に評価しあっていること、また友人にはむやみに自己高揚を行わないが、家族には自己高揚的自己呈示を行っていること、またその方法を取る方が社会に適応的であることが指摘された。つまり、自己高揚の傾向は、文脈や相手を見て判断した上で行われていることが示唆された。

第7節. 結語

自己評価のシステムに関連する、文化間に共通、あるいは固有の要因について検討し、特に顕在的に表出される場合には、文化規範の影響を受けていることが示唆された。本研究の結果をモデル化すると、人の自己評価には意識的ではない部分での潜在的なポジティブ視・ネガティブ視があり、その周辺に、顕在的な評価があると考えられる。この顕在的な自己評価は常に文化規範や評価懸念の影響を多分に受けており、同一人物でも、生活する文化や環境によって変化しうると考えられる。そして、社会的行動や判断を行う際には、その規範に合うような行動や自己呈示が行われる。その結果、親しい他者から好意的な、あるいは非好意的な評価を受け、さらにそれが精神的健康や、親しい他者との関係良好性、そして主観的幸福感へと影響するのである。親しい他者の重視は、文化を超えた共通点だと考えられる。

本研究の結語として、近年の自己評価に関する比較文化的研究の結果に反し、日本人は心の底から自己の能力を低く見積もっているわけではなく、自己卑下を行うのは「文化規範に合致した自己呈示」の影響であるということを再度指摘したい。日本・北米にかかわらず、人には自分をポジティブ視したいという気持ちはあるが、文化規範を無視し、それに伴う人間関係の良好性を無視して生きていくことは不可能であろう。人は常に他者との関係がうまく維持されているかを「測り」ながら(Leary & Downs, 1995)、それぞれの社会・文脈で自分にとって最大限の社会的満足感を得られるよう生きているのであろう。

論文審査の結果の要旨

本論文は、自己評価のシステムを取り上げ、その文化固有の特徴、文化間に共通な特徴を抽出した文化比較心理学的な研究である。基本的には自己を肯定せずしては、社会的な行動は展開しないが、同時に、他者と合わせていくことも欠かせない。自己高揚(バイアス)、自己卑下の行動を基本的な行動例として、主に北米と日本での調査・実験を展開し、その結果に基づきながら、文化規範や社会的関係の作用するメカニズムについて考察している。従来、日本人は、北米の人々に比べて、自己卑下の、主張性が乏しいとの指摘が少なくないが、それは、部分的な指摘にとどまると言える。この論文においては、比較対象者、状況の設定、自己肯定感を測定する指標の工夫(自尊心、主観的幸福感、心理的健康など)した、多様な研究の結果から、ともに、両文化圏に自己肯定感は共通することであり、それに加えて、日本文化規範に合致した自己呈示として、自己卑下を行うことを指摘している。研究方法として、調査法のマクロな傾向把握に留まることなく、潜在的な認知反応を測定する方法をも組み入れ、自己呈示理論、集合構

成理論、自尊理論などを基本的なベースとしながら、上記のように社会的な自己表出の意味を実証的に明らかにしている。

その実証性と多様な研究の展開、理論的統合の調和のとれた論究は、博士（人間科学）の学位授与に十分に値するものであると判定された。